

GRAND MARBLE ENTA!

Cinema

震災後の日本が見いだす「希望」とは? 園子温監督最新作は社会派エンタテインメント



©2012 The Land of Hope Film Partners

希望の国

THE LAND OF HOPE

脚本&監督・園子温、出演・夏八木勲、大谷直子、村上淳、神楽坂恵、清水優、梶原ひかり
10月20日(土)より 新宿ピカデリー、なんばパークスシネマ、MOVIX京都 はか全国ロードショー
www.kitounokuni.jp

町の原子力発電所が地震で爆発し、父と母、若い息子夫婦で酪農を営んでいた小野家の暮らしが、「その日」を境に一変する。映画の中では架空の町が舞台にはいるが、園子温監督自らが被災地の人と暮らしを取材し、災害の傷跡が生々しい被災地でロケを敢行したリアルな社会派作品だ。「原発事故は、どこまで被災地が現えない災害。それをいま撮っておくべきだと思いました。被災したあらゆる町を取材していろんなシチュエーションをまとめました。台本には現実の震災や津波の被災地に存在したことを書いています」。生まれ育った土地から離れない父・泰彦と母、避難先で新しい生活を始めた息子の洋一と妻のいずみ。泰彦は度重なる退避勧告を頑として拒否し、妊娠したいいずみは、お腹の子供を放射能から守るため、なりふりかまわぬ行動に出る。一見共感しづらい部分もある彼らの行動を、映画は否定も肯定もしない。「原発がいい、悪いの問題ではなく、事故が起きたら必ずこうなるということを描いておきたかったんです。映画は一つの大きな質問状だと思っています。簡単な言葉で言い得てしまうことなら、わざわざ映画をつくる必要もない。この作品を観た観客が一人一人答えを出すべきだと思う」。震災後、被災地でもそれ以外の土地でも不安から逃れられない日々が続いている。「希望の国」はどこにあるのか。

「実際、出口はまだ見えないし、具体的な希望はまだ存在していないと思う。ただ、人間の心の中には眼に見えない希望が存在しえると思っています。不安だからこそ、がんばって自分から希望をつくる。それが今の日本かもしれない」。だが、人間の心の中には眼に見えない希望が存在しえると思っています。不安だからこそ、がんばって自分から希望をつくる。それが今の日本かもしれない。



Profile 作品を発表することに国際映画祭を賑やからず鬼才。「冷たい熱帯魚」(2011)はヴェネチア国際映画祭オリゾンティ部門出品、「恋の罪」(2011)で、カンヌ国際映画祭監督週間出品、「ヒミズ」(2012)は主演のふたりにヴェネチア国際映画祭でマルチチェロ・マストロヤニ二賞をもらった。

Play

役者として、男として 自然体で進化を続ける 俳優・田中圭の心の変化とは?



ドラマ「おひさま」をはじめ、映画や舞台、CMなど、多彩な演技で独特の存在感を放つ俳優・田中圭さん。本誌には1年半ぶりのご登場。爽やかな笑顔は変わらないものの、28歳を迎えたその横顔はぐっと精悍になり、瞳の奥には大人の男性らしい落ち着きも漂わせる。「デビューして10年以上、無我夢中で走り続けてきたけれど、最近やっと気持ちのゆとりが出てきた気がしますね。半年後、1年後に自分がどうありたいか?を考えると余裕が出てきたり、ベストパフォーマンスを引き出すためのメンタルづくりにも意識を向けたり」。その心境の変化には、充実したキャリアを重ねることで得た自信や、大切な家族と過ごす時間が大きな影響を与えているよう。

もちろん、「忙しければ忙しいほど遊ぶ(笑)」という、彼流のリラックス法も健在。親しい仲間と飲みにも行ったり、ハードな舞台の合間にバスケの練習にも顔を出す。仕事を離れて「ダイレクトにハートに響く時間を持つ」ことこそが、俳優と

としての並らぬ集中力を保つ秘訣なのだろう。8月には「鎌塚氏、すくい上げる」の舞台公演、秋には連続ドラマや、映画「みなさん、さようなら」(中村義洋監督作)の公開も控える。「熱気あふれる現場では、演技に思わぬ化学反応が起こることも。そんな最高の瞬間に立ち会えることが、毎回楽しくて仕方ないんです」。



M&Oplaysプロデューサー
「鎌塚氏、すくい上げる」
8/9~8/26 本多劇場(東京)
9/1~9/2 サンケイホールブリーゼ(大阪)
名古屋・島根公演あり
問い合わせ: M&Oplays 森崎事務所
http://www.morisk.com

Profile 1984年生まれ。東京都出身。2000年にデビュー後、ドラマ「WATER BOYS」(2003年)で注目を集める。近作に、映画「レンタコ」(アフロ田中)、ドラマ「おひさま」(それでも、生きてゆく)「私が恋愛できない理由」(デカ黒川鈴木)、舞台「幻蝶」など。CMやナレーションなどで幅広く活躍中。

新連載

NEXT BREAK Profile

杉山麻衣さんが、いまイチオシの俳優をプロフィール。
新しい才能をいち早くキャッチ!



Vol.1 刈谷友衣子

ABOUT Yuiko Kariya

「自分にとって、なにが変わるきっかけになれば」と雑誌「ラブベリー」の専属モデルオーディションに自ら応募して、デビュー。瞬時に注目の女優に。プレッシャーも大きそうなのだが、「楽しい現場ほど、プレッシャーを感じます。「いい」プレッシャーは自分にとってもプラスだと思いますが、自分は自分でしかないという気持ちは常に持っています」と、上手にマイペースを保っている。「人として女優として魅力的な人間でありたい…今はいい意味で自分を捨てて、もっと柔軟になりたいです。あと、語学力をつけて幅広く活躍する女優になりたいです」と将来を語る。

Profile 1996年生まれ。愛知県出身。モデルを経て2010年、映画「告白」に出演。2011年、NHKドラマ「金魚倶楽部」ヒロインに。CM、ドラマに活躍中の女優。

◎刈谷友衣子 出演作

「スープ〜生まれ変わりの物語〜」

刈谷友衣子が演じるのは、生瀬勝久演じる父が、死んでなお思い続ける愛娘・美加。父と娘の絆と愛の物語。2012年7月7日(土)より全国ロードショー
http://www.soup-movie.jp/

「バルーンリレー」

女子中学生の目の前に現れた赤い風船をきっかけに、謎めいた事件が次々と起こって…。刈谷友衣子初主演作。全国順次公開
http://www.balloon-relay.jp/



マーブルフィルム キャスティングディレクター 杉山麻衣のコメント

15歳とは思えない落ち着いた雰囲気を持ちつつ、笑った顔は等身大。そのギャップが可愛いらしくて、オーディションで出会った時、目が離せませんでした。透明感と存在感が抜群で、映画、ドラマはもちろんだら、CM等でも求められるキャラクターだと思います。青春モノはもちろんだら、おどろき話のようなファンタジックな世界観の作品のヒロイン役で彼女をキャスティングしてみたいです。

Profile 愛知県出身。主に映画や舞台のキャスティングを担当。最新作: 園子温監督「希望の国」(2012年秋公開)、大貫いずみ監督「ユダ」(2012年公開)

映画「しあわせのパン」の監督・三島有紀子 おいしさと分かち合いの、一期一会

北海道の雄大な自然の中にあるパンカフェを舞台にした映画「しあわせのパン」は心地よい暮らしをおくる一組の夫婦と、香ばしいパンたちが印象的な映画。「パンって、粉と水というとてもシンプルなものから、作り手によってさまざまな味やいろんな形が生まれる、それはまるで魔法のようで、ものづくりの原点のような気がします」。

登場するパンやスープの温かさには、観ていて誰もが幸福になる。

「阪神淡路大震災では、多くの避難所で、みんなが食べものも着るものも気持ちも分け合っているのを見ました。そのとき、人は何かをshareして生きている。当たり前のことですが、人が人と生きて行くことは誰かと何かを分け合うことなんだと感じました。この映画で、それを言葉ではなく視覚的に表現できたと思った時、目の前のテーブルにまさに、パンがあったという訳です。自分でパンをふたつに分けてみて「これだよな」と思いました」。

パンとの出会いが生んだ映画。その撮影も一期一会だそう。「現場でパン生地の発酵が最高の状態になると『じゃ、先にパンのシーンを撮ろう』とスケジュールがパン合わせになったことが何度もありました。(笑)。自然もパンも生き物ですから、いい瞬間は二度と来ません」。



「しあわせのパン」
主演: 原田知世 / 大泉洋
2012年7月6日DVD、Blu-ray 発売
DVD ASBY5362 5040円 / Blu-ray ASBD1052 6090円
(いずれも初回生産限定仕様、税込)

©2011「しあわせのパン」製作委員会

Profile 大阪生まれ。18歳からインディーズ映画を撮り始め、大学卒業後、NHKに入局。「NHKスペシャル」など、ドキュメンタリー作品を監督。「映画を撮りたい」とフリーランスになり、映画「しあわせのパン」(主演・原田知世 / 大泉洋)で初の長編映画監督を務める。また、小説「しあわせのパン」(ポプラ社)も上梓。巻末に掲載されている絵本「月とマーニ」の文も執筆している。



photo: SATOFOTO